



三重大学

医学部

No.189 2022.10.1

News

目 次

令和3年度卒業生の看護師等国家試験結果と合格者の進路状況	片岡 三佳	2
教授就任のご挨拶	新堂 晃大	3

トピックス

三医会の活動について	井村 正史	4
医学科オンラインオープンキャンパス2022開催報告	百崎 良	6
看護学科webオープンキャンパス2022の開催報告	坂口 美和	8
令和3年度キャンパスデジタル化推進費事業の報告	今中 恭子・渡邊 昌俊	9

学会だより

第114回 東海心臓外科懇話会を開催しました	庄村 遊	10
がん予防学術大会2022京都の開催報告	渡邊 昌俊	11
『第288回 日本泌尿器科学会東海地方会』を主宰して	西川 晃平	13
第36回日本整形外科学会基礎学術集会会長報告	湊藤 啓広	14
第159回日本循環器学会東海地方会	藤本 直紀	17
第39回日本呼吸器外科学会学術集会 若手呼吸器外科医Case presentation award最優秀賞を受賞して	川口 瑛久	18
第69回日本小児保健協会学術集会を主催して	平山 雅浩	18
第62回日本先天異常学会学術集会 優秀演題賞を受賞して	八十島左京	19
「日本医療薬学会2022年度JPHCS誌論文賞」を受賞して	岡本 明大	20
日本病院薬剤師会 江口記念がん優秀活動賞を受賞して	赤阪 未来	22
第46回 日本リンパ学会総会 西賞 第29回 日本血管生物医学会学術集会 YIA優秀賞 を受賞して 新規リンパ管内皮細胞起源の同定	丸山 和晃	23
第60回日本耳鼻科学会総会・学術講演会 若手奨励賞・会長賞を受賞して	森下 裕之	24

学位記授与		25
-------	--	----

令和3年度卒業生の看護師等国家試験結果と合格者の進路状況

看護学科学生委員長 片岡 三佳

令和4年3月卒業の本学看護学科第21期生の看護師等国家試験結果（第111回看護師、第108回保健師、第105回助産師）と進路状況について、ご報告します。

国家試験の結果を下記（表）にお示しします。令和3年度の看護師等国家試験では当学科卒業生81名のうち、新卒者全員が看護師資格に合格しました。また、保健師資格を受験した18名中17名、助産師資格を受験した6名中6名が合格しました。昨年度に続いて、看護師および助産師は100%の合格でした。保健師に不合格となった1名も、看護師としての就職が決定しており、進路に問題は生じておりません。

今回の合格率は、全国的に見て保健師の低下が認められます。今回18名の学生が看護師および保健師、6名の学生が看護師および助産師、それぞれ2つの国家試験を受験し、国家資格を得ております。複数の国家資格を受験する準備は容易ではありませんが、努力して目標を達成しております。

卒業生81名の進路は、就職78名（看護師69名、保健師3名、助産師6名）、進学3名（大学院2名・助産学専攻別科1名）でした。就職先は、県内51名、県外27名、このうち三重大学医学部附属病院は42名（看護師38名、助産師4名）でした。

昨年度と比較すると県内への就職が増加し、なかでも本学附属病院への就職が8割を超え、多い状況が継続されています。

看護学科ではゼミナール指導教員が4年生とのコンタクトを高め、学習、進路、その他の相談に適宜応じる懇切な指導体制をとっています。学科教員一同、国家試験の高い合格率をめざし、気持ちを新たに取り組んでおります。近年の就職試験の状況やCOVID-19パンデミックを考慮し、進路を熟考する期間を確保するために新4年生を対象にした進路説明会を早期に行うこととし、2月に開催しました。この進路説明会では、国家試験、進学や就職に関する情報を提供し、個々の進路についてよく考える機会としています。

今年度も引き続き国家試験に向けて高い効用が認められる模擬試験が活用されており、看護学科育成会からは国家試験対策への援助（模擬試験等）のご支援いただき、学生の自己学習に非常に役立っています。

現在、看護師や助産師の社会的需要は非常に高く、各地の医療機関は、質の良い看護職の確保に大変な努力を続けています。三重大学附属病院では、病院長、看護部長をはじめ多くの方々が進路説明会や育成会総会など、機会あるごとに看護学

医学部看護学科21期生 国家試験合格状況
（第111回看護師、第108回保健師、第105回助産師）

	看護師			保健師			助産師		
	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
全 国	65,025	59,344	91.3%	7,948	7,094	89.3%	2,089	2,077	99.4%
うち新卒者	59,148	57,057	96.5%	7,504	6,975	93.0%	2,078	2,071	99.7%
本 学(新卒)	81	81	100.0%	18	17	94.4%	6	6	100.0%

※本学…開示に同意が得られた81名

科へ足を運んで下さり、本学附属病院の活況や支援体制など、熱意を込めて語っていただいております。

学生委員会としても学生に適切な進路が開ける

よう活動していきたいと考えております。引き続き、医学部ならびに附属病院各位、ゼミナール指導教員各位のご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。

教授 就 任 の ご 挨拶

三重大学大学院医学系研究科 臨床医学系講座 神経病態内科学 教授 新 堂 晃 大



2022年7月1日付で三重大学大学院 医学系研究科 神経病態内科学（脳神経内科）教授を拝命いたしました新堂晃大（しんどうあきひろ）と申します。私は

三重県松阪市の出身で1995年に三重大学医学部に入学、2001年に卒業をしました。学生時代、授業や病院実習で実際の患者さんを症状の推移や診察から先生方が病変の指摘、診断から治療に至ることに興味を持ち神経内科の道を志しました。当時は卒後臨床研修制度の始まる前の時代でしたので卒業後すぐに神経内科（初代教授 葛原茂樹先生）に入局し、研修医として勤務させていただきました。そこでは神経内科のみならず内科や外科、さらに脳神経外科、整形外科で研修をさせていただきました。様々な疾患を経験させていただいております。その後は県内の医療機関で診療をさせていただき、2005年から三重大学医学部附属病院での診療をさせていただいております。神経内科医として脳卒中、脳炎などの急性期疾患から神経変性疾患、神経・筋疾患、末梢神経障害などの診療を行い、専門医取得をしながら、脳卒中による神経症候や紀伊半島の神経変性疾患である牟婁病の高次脳機能について学び研究を始めました。

2008年、当科は新たに冨本秀和教授が新たに就任され、脳血管障害を中心とした研究が始まりま

した。私は2009年に大学院へ進学し、基礎研究や臨床研究をさせていただいております。2013年に学位を取得させていただき、2014年から2年間米国マサチューセッツ総合病院／ハーバード大学へと留学をさせていただいております。留学中は中枢神経系の様々な細胞の初代培養作成技術や脳血管障害のマウスモデル作成を行い、脳血管障害の新たな治療法開発の研究に取り組みました。2016年に帰国後からは留学で得た技術を生かし、*in vitro*, *in vivo*といった基礎研究から、心房細動の患者様の認知機能、MRI画像や剖検脳を用いた研究など様々な内容の研究を行っております。当科で行った研究は循環器内科、血液内科、放射線科、脳神経外科、救急科の先生方や衛生学教室の先生方など三重大学内で様々な診療科、教室の先生方にご協力いただき実施できたもので、これは教室間の垣根が低い三重大学だからこそ可能であったものと考えます。このように三重大学ではそれぞれの教室と連携できることがとても素晴らしく、今後も様々な教室の先生方と共同研究などできるように連携できればと考えております。

診療に関しまして、神経内科では脳や脊髄といった中枢神経系疾患、神経筋接合部や筋疾患、また末梢神経障害まで幅広い疾患がその対象となります。救急疾患では脳炎や髄膜炎といった炎症性疾患、脳血管障害があり、近年脳血管障害に対しては血栓溶解療法や血管内治療の発展が目覚ま

しい領域です。さらに神経変性疾患でも脊髄性筋萎縮症などでは新たな治療が出現し、これまで不治の病といわれていた一部の神経難病でも治療が行えるようになりました。三重大学脳神経内科では、大学病院として高度先進医療を開発、提供すること、さらには三重県内の基幹病院で様々な疾患に対する治療が可能となる体制を構築することが必要と考えます。さらに教育面では卒前・卒後教育を通じ地域医療から高度先進医療まで様々な

場面で活躍できる医師の育成に取り組んでいきます。これらの教育と診療を通じて三重県の地域医療を担う神経内科医の育成を行ってまいります。

この三重大学をさらに発展できるよう、また三重大学のみならず三重県の医療に少しでも貢献できるよう努めさせていただきます。そしてこれから多くの方々と出会い一緒に学び診療ができることを楽しみにしております。

トピックス

三医会の活動について

三医会 会長 井 村 正 史
(昭和 56 年卒業)

このたび医学部ニュースに投稿する機会を昨年に引き続き与えて頂き誠にありがとうございます。今号でも活動内容などについて紹介させていただきます。一部重複しますがご容赦ください。

三医会の正式名称は「三重大学医学部医学科同窓会」で、三重大学医学科卒業生・在學生、ならびに大学院医学研究科修了者・在籍者、および他大学・他学部出身の医学部教員・研究者などを会員として組織しています。

三医会は昭和30年5月29日に設立総会が開催され、昭和34年に岩名俊作先生（昭和30年卒）が初代会長に選出されて名実ともに同窓生による同窓会三医会が発足しました。

会員相互の親睦、融和を図り、母校発展に尽くすことを目的としています。

主な事業として

1. 「三医会会報」の発行
2. 会員名簿の発行
3. 三医会賞・三医会奨励賞などの研究助成
4. 学生支援として臨床実習に臨む医学科学生

への白衣授与

5. 支部活動（関東支部・東海支部・関西支部）などを行っています。

1. 三医会会報は毎年1回5月に発行しています。昭和30年12月20日に「三医会々誌」第1号が発行され昭和55年の第13号発行後しばらく途絶えていましたが、平成3年に新しく「三医会会報」として再出発となり今年第35号を発行しました。医学部の動きや学生諸君の西医体成績・国試成績、会員計報・追悼文、同窓の声・風信帖、公益財団法人三重医学研究振興会記事など詳細な内容で、巻末のトピックスに要点をまとめています。所在の判明している会員全員に発送しています。（毎年5月下旬）
2. 三医会会員名簿は2年に1回11月に発行しています。2018年に内容を一新、今年11月には2022年版を発行予定です。個人情報保護の観点から注意が必要となりますが、ご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

3. 三医会賞は昭和57年から始まり合計69名の受賞者を輩出した後、平成29年度からは公益財団法人三重医学研究振興会との共同で新たな三医会賞が制定されました。受賞者は平成29年度間山裕二先生（H9）・土肥薫先生（H6）、平成30年度山口素子先生（H1）・杉本和史先生（H4）・杉本昌彦先生（H8）、令和元年度北川覚也先生（H9）・中森史朗先生（H12）、令和2年度中川勇人先生（H12）・奥川喜永先生（H15）、令和3年度栗山直久先生（H11）で、それぞれ賞金300～100万円が授与されています。三医会奨励賞は平成23年から始まり、医学科大学院4年生の中から毎年5～10名程度が選出されています。若手研究者の登竜門的な存在になればと考えています。

三医会賞受賞者は他の三重医学研究振興会研究助成金授与者（三重医学若手研究者賞・吉田壽記念三重医学研究振興会賞・三重医学貢献賞・緑の風記念三重医学研究振興会賞）と共に毎年12月第3日曜日に開催される「三医会・三重医学研究振興会研究助成金授与式」において受賞と共に研究発表を行っています。毎年新しい知見があり非常に有意義なイベントとなっています。研究成果報告書として三医会会報に詳細な内容を掲載しています。三医会奨励賞は毎年6月第3日曜日に開催の「三医会総会」において授賞式が執り行われます。研究助成は三医会活動の中でも根幹とも言うべき重要な事業と考えています。

4. 臨床実習に臨む第4学年学生に対して「白衣授与式」が毎年1月に開催されていますが、第3回（2009年（平成21年））から毎回三医会から白衣を授与しています。学生支援として恒例となっていますが、同窓意識高揚のためにも非常に意義深いと確信しています。今のところは1人一着の白衣授与ですが、今後

発展させていきたい所存です。

5. 主な支部として、関東支部・東海支部・関西支部があり積極的に活動し親睦を深めています。

各支部では卒業後三重を離れて研修する若手医師のみなさんへの支援も行っていますので、必要な時にはぜひご一報下さい。（関東支部長：山中寿（S55）、東海支部長：水元亨（S61）、関西支部長：室生卓（S61））卒業後に三重を離れて研修予定の学生さんを対象に、各支部からの紹介・説明会的なイベント開催を検討中です。

三医会では医学部・附属病院・学生のみなさんに協力・支援するために大きなイベントの折には寄付活動を行ってきました。

創立50周年記念事業での寄付金総額1億2000万円の中から5000万円を基金として財団法人三重医学研究振興会が設立され、平成26年までに総額2億2650万円の学術助成が行われました。その後公益財団法人となり三重県の医学研究者などに対する助成を、平成29年度からは三医会と三重医学研究振興会が合同して行っています。令和3年度は、三医会賞（医学研究部門）1名・三重医学若手研究者賞（医学研究部門）5名・吉田壽記念三重医学研究振興会賞（臨床医学部門）3名・三重医学貢献賞（医学教育・社会貢献部門）2名・緑の風記念三重医学研究振興会賞（基礎医学・看護学部門）3名で助成総額は1110万円でした。

平成18年三重大学振興基金創設に伴い、19年9月から3年間募金活動を行い総額6260万円の寄付が集まりました。寄付を基に附属病院12階の三医会ホールが完成して現在多目的に活用されています。また将来的な医学部学生のための新クラブハウス建設に対しても支援を行う方針が継続しています。

新しい試みとして、三重大学全学同窓会が中心となって三重大学ホームカミングデイが来年度か

ら開催されることになっています。まず手始めに三重大学ホームページ新設が行われますが、各学部同窓会から必要経費を分担する予定です。全学的な同窓生意識の高まりが大いに期待されます。

2年後の2024年には医学部創立80周年となります。今年度中に医学部が主体となって「実行委員会」が立ち上げられる予定と伺っていますが、記念事業として医学部学生のための新クラブハウス建設がいよいよ実現しそうです。その際には三医会としてしっかり支援できるような体制で臨みたい所存です。

三医会の存在意義はあくまでも母校の医学部や学生諸君に対しての協力・支援であると思っています。三医会では会員拡充を目指して、平成

19年からは医学部入学時に入会して頂く、また23年からは他大学出身の先生方にも入会して頂けるようになりました。三重大学医学部に関係するみなさんが柔軟な仲間意識を持って医学部を大いに盛り立てていけるよう切に願っています。

残念ながら一昨年からのコロナ禍で思うような活動が困難な状況ですが、明るく楽しく参加できるような同窓会でありたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

*三医会事務局

先端医科学教育研究棟（医学部基礎校舎）1階

担当：廣さん、前田さん

電話 059-231-5469（内線 6317）

医学科オンラインオープンキャンパス2022開催報告

高等教育デザイン・推進機構アドミッションセンター 百 崎 良

2022年の医学科オープンキャンパスは新型コロナウイルス感染症の影響を受け、8月9日にオンラインにて実施されました。体験型企画（病院見学やスキルズラボを使用した手術体験実習など）はサマーセミナーの方で実施予定となっていること、感染予防対策を行いながらでは参加人数を絞らざるおえず、オンラインの方が多くの方に参加して頂けるという側面もあり、オンデマンド企画とライブ企画を実施しました。

まずオンデマンド企画ですが、医学科紹介動画を三重大学オープンキャンパス特設サイトにてオンデマンド配信しました。堀 浩樹 医学系研究科長・医学部長による医学部長挨拶と学部紹介（図1）、池田 智明 附属病院長による三重大学医学部附属病院の紹介（図2）、西村 有平 教務委員長による医学科カリキュラム説明、成田 正明 入試委員長による医学科令和5年度入試説明、三重

県医療保健部より三重県医師修学資金制度の説明、そして一昨年より実施しているバーチャルホスピタルツアーを今年も公開していただきました（図3）。また、各講座・診療科の紹介動画を事前募集し、特設サイトにて公開、医学科のデジタルパンフレットも改訂し、オープンキャンパスサイトから閲覧いただけるようにしました。

またZOOMを使用した医学科セミナーをライブ企画として実施しました（図4）。医学科4年の西村悠里奈さんから在学生による学生生活紹介、救急科の羽根敦也先生より臨床医の生活紹介、法医学分野の小谷泰一先生より基礎系教授による模擬授業、リハビリテーション医学分野の百崎より臨床系教授による模擬授業を行いました。定員いっぱいの280名が参加、事前質問も多数いただき、質疑応答も大いに盛り上がりを見せました。ライブの内容に関しては、編集した動画を



図 1. 医学部長挨拶と学部紹介



図 3. バーチャルホスピタルツアー



図 2. 三重大学医学部附属病院の紹介



図 4. 医学科ライブセミナー

表 1. ライブ企画に頂いた事前質問の抜粋

受験勉強に関する質問

- 1 医学部を受験する高校生が特に力を入れて勉強すべき教科や分野を知りたいです。
- 1 入学のための勉強方法について（1日の勉強時間、息の抜きの方法等）
- 1 現在高校の勉強で躓いていて成績もあまり良くないのですが、医学部というレベルの高い学部をこのまま志望していても大丈夫でしょうか？
- 1 高校時代または受験の際、理系の科目は生物や化学、物理、地学などからどれを選びましたか。また「やっぱりあの科目を選んでおけばよかった」と後悔した科目はありましたか。

学生生活に関する質問

- 1 医学部医学科でも、サークルやバイトをすることはできますか？
- 1 他学部、他大学との交流はありますか？
- 1 学校生活で楽しいことときついことを教えてほしいです。
- 1 研究室配属の時期や期間、希望通りに配属されるのかについて。

三重大学の特色に関する質問

- 1 三重大学医学部医学科の特色、特徴、力を入れている分野、今後求める人材について話してほしいです。
- 1 他大学と比べたとき、三重大学医学部医学科の強みはなんですか。他の大学と差別化出来る点はありますか？
- 1 医学界の中で三重大学が強い分野があれば教えて下さい。

卒業後に関する質問

- 1 研修医として病院へ行くのは、どこの病院が多いですか。
- 1 三重県ではどの診療科医が不足していますか？
- 1 グローバル化教育が盛んですが、実際に海外で研究活動を行ったりする人はどれくらいいますか？
- 1 三重大学医学部の強みである海外実習に魅力を感じています。卒業後に海外に行かれる方は多いのでしょうか？
- 1 地域医療の問題点、課題等、地域医療について、また地域枠で進学された方のその後について伺いたいです。
- 1 将来的に臨床と研究、どちらもできるような進路はあるのか。

後日、特設サイトにて公開して頂きました。

昨年に引き続き今年も対面式での実施ができませんでしたが、ご関係の先生方のご尽力のおかげもあり、昨年同様のコンテンツの提供に加えて、臨場感あるライブ企画を実施することができました。各先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。

オープンキャンパスはキャリアパス教育、入学前教育として、高校生にとって貴重な機会となっています。受験生や保護者にとっては、三重大学

の特色や学生生活、受験勉強の工夫などの情報を求めて参加されているものと思います。これはライブ企画に頂いた事前質問からも垣間見ることができました（表1）。オープンキャンパスのオンデマンド企画は秋のミニオープンキャンパスでも再度公開予定となっております。来年はオンラインオープンキャンパスの良い点を残しつつも、対面での開催ができることを祈り報告とさせていただきます。

看護学科webオープンキャンパス2022の開催報告

高等教育デザイン・推進機構アドミッションセンター
准教授 坂口 美和

今年度のオープンキャンパスは、昨年度と同様にwebを用いた開催となりましたが、オンデマンド配信だけでなく、Live配信や個別相談を取り入れた企画を行いました。

①Live配信では、学科長の挨拶、模擬講義、卒業生からのメッセージ、卒業生・在校生への質問コーナーの時間をつくりました。②また、Zoomを用いた個別相談が行える機会を設けました。③さらに、オンデマンド配信の動画を作成し、オープンキャンパスの期間中、自由に閲覧ができるようにしました。ここでは、それぞれについて報告します。

Live配信は、事前申し込みが280名、当日は224名の参加がありました。東海3県以外にも大阪や広島、茨木、長崎等、遠方からの参加者もいました。学科長の挨拶のあと、榊屋正浩教授の30分模擬講義「血液の役割を知ろうー血液型のミニ知識も添えてー」を行いました。高校生たちには馴染みのある血液や血液型の話でしたが、より専門的な内容になることで、人の身体の不思議や分からないことがまだまだたくさんあるのだ、という学問への興味関心が刺激される内容だったと思います。

卒業生からのメッセージでは、現在、大学院生になっている2人から、学部での授業だけでなく、部活動や国際交流について、自分の興味関心の幅を広げて学ぶ体験を聞きました。その後、現役の学部生3人を交えて、高校生からの質問に答える時間を持ちました。チャットに質問を入れてもらい、当初、予定していた時間を20分延長するほど反響でした。「先輩たちの話が聞けてとても参考になった」と参加者の声も届いております。

個別相談においては、入試について（2ブース）、助産師課程について、保健師課程について、学生生活・進路について、学業のことについて、寮・奨学金等学生支援についての6つの相談内容で7ブースを用意し、事前予約制にしました。1人10分の時間を有効活用するためにも、事前に質問を入力していただき相談ができるようにしたこと、多くの方は十分に話をすることができていました。しかし、中には、相談時間が足りないことや、質問内容が多岐にわたるなど、相談者の個性に対応しきれないこともありました。また、予約はしたけれども参加はしなかった人もいました。今回の体験を踏まえて来年度の個別相談を考えていき

たいと思います。

オンデマンド配信につきましては、学部・学科・研究科紹介、入試説明、卒業後の進路について、保健師課程の紹介、助産師課程の紹介、国際交流活動の紹介、三重大学附属病院看護部作成の動画3本、三重大学医学部看護学科へようこそ（三重看護フェスタ用動画）、の8本の動画を準備しました。また、当日のLive配信の内容も質問コーナーを除いてオンデマンド配信にしております。どれを見ていただいても看護学科の強みを感じていただける動画になっています。これまで三重県看護協会を通じて高校生から助産師や保健師

の資格の取り方、試験方法についての質問をいただいております。それらの質問には、回答を出しておりますが、今回の動画を見ていただくと、在学生も参加しての動画になっていますので、学生の視点でより分かりやすい内容になっていると思います。今後は、より多くの高校生に見てもらえるような工夫が必要であると考えております。

こうして今年も無事にオープンキャンパスを終えることができました。これもひとえに、卒業生や附属病院スタッフの皆様、その他関係者の皆様のおかげと感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和3年度キャンパスデジタル化推進費事業の報告

大学院医学系研究科 修復再生病理学 今中恭子
大学院医学系研究科 腫瘍病理学 渡邊昌俊

令和3年度キャンパスデジタル化推進費事業を報告させていただきます。令和3年度キャンパスデジタル化推進費事業に“理学系横断的マクロ・ミクロ画像ポートフォリオ環境の構築：次世代医学教育・医療を支える「バーチャルラボ・デジタルラーニング」環境の構築を手始めに”を医学部から申請させていただき、採択されました。目的は、理学系横断的マクロ・ミクロ画像ポートフォリオ環境の構築を目指すべく、デジタルトランスフォーメーションによる病理関連データなどを医学教育、医療を支える「バーチャルラボ・デジタルラーニング」環境を構築することです。

実施された事業は、（1）病理診断の基盤である病理ガラス標本をデジタルアーカイブ化し、病理関連デジタルデータを関連諸科とのカンファレンス、教育に利用する、（2）デジタルスキャナーを利用してマクロデータをデジタルアーカイブ化する、（3）病理解剖における臨床病理デジタルアーカイブを利用し、医療経験を提供する事の3

つからなります。今回は、（2）、（3）について、報告します。

以前は、基礎医学校舎に大理石と思われる解剖台と数段の見学者用の階段を有する開放的な剖検室で、病理解剖が行われていました。その後、一時、旧病院内の仮施設に移行し、2012年1月1日に、新病棟・診療棟が開院した時に、新たな剖検室の運用が開始されました。場所は、1Fの職員出入り口（病院正面）より直進し、反対側の出入り口（動物施設側）手前にあります。現在の解剖室は、陰圧で、ステンレス製の解剖台を有します。昨今、日本のみならず世界でも剖検数が減少し、さらにコロナ禍にて、コロナ陽性のご遺体の病理解剖に際し、設備等に厳格な条件が求められているため、現実的にはほぼ行われない状態となっています。

今回、剖検室に无影灯、カメラおよびマイクなどを設置し、剖検室に隣接した見学室で、リアルタイムで画像を閲覧でき、また録画することができるようになりました（写真）。このことにより、

医学部学生、研修医などを対象に、解剖中の臓器の肉眼所見について詳細かつ安全に見学ができるようにしました。医学部学生、研修医などリアルタイムに病理解剖に立ち会うことは難しい状況ですので、剖検会においても録画などを利用して行う予定です。一方、現在も病理学会を中心に議論されているところですが、このような病理解剖の録画データなどの取り扱いにおいては、当然情報

管理に十分な注意を払う必要があると思われます。また、病院のシステムに組み込むことにおいても、難しい問題を抱えております。しかしながら、今回のキャンパスデジタル化推進費事業として、教育および医療の環境を整えていただいたことを、大学に感謝すると共に、有効に活用していきたいと考えております。



解剖室映像システム

学会だより

第114回 東海心臓外科懇話会を開催しました

胸部心臓血管外科 准教授 庄 村 遊

当教室が当番幹事となった第114回東海心臓外科懇話会を、9月3日（土）14：00～18：00 アスト津：アストプラザにて開催しました。今回は例年になく演題応募が多く、想定数を超える演題が集まり、結局、発表演題を16題に絞らせていただきました。

感染対策を考え、ソーシャルディスタンスを十分にとれる会場（津駅近接の定員270人の大ホール）を予め準備していたため、従来通りに演者、座長、会場参加者は会場集合とし、久しぶり（2020年2月以来）の対面の会を行うことができました。

特別講演として、MICS手術の第一人者であられ、海外での臨床経験の豊富な旭川医科大学 心臓大血管外科分野 紙谷 寛之教授をお招きし、『旭川医大における心臓外科医養成の試み』でご講演いただきました。



コロナ禍のため、参加者が少ないことを想定しておりましたが、予想以上の約50名の参加者を得、活発な討議となり、予定終了時間を40分程、超過することとなりました。

第114回 東海心臓外科懇話会
～臨機応変。反省も踏まえて・・・～

プログラム・抄録集

日時：令和4年9月3日（土）14:00～

会場：アスト津：アストプラザ
〒514-0009 津市羽所町 700 番地
アスト津 4 階

【開催幹事・世話人】
三重大学大学院医学系研究科 胸部心臓血管外科 庄村 遼
〒514-8607 三重県津市江戸町 2 丁目 174 番地
Tel: 089-231-5021
E-mail: tora@clin.medic.nie-u.ac.jp

【事務局】
名古屋大学大学院医学系研究科 心臓外科
〒460-8600 名古屋市中区鶴舞町 66
Tel: 052-744-2378 Fax: 052-744-2383

がん予防学術大会2022京都の開催報告

三重大学大学院医学系研究科腫瘍病理・医学部附属病院病理部・バイオバンクセンター
渡 邊 昌 俊

さる2022年7月1日（金）、2日（土）に、第45回日本がん疫学・分子疫学研究会総会は第29回日本がん予防学会総会（京都府立医科大学・武藤倫弘会長）と合同で、“がん予防学術大会2022京都”を京都府立京都学・歴彩館にて合同開催いたしました。武藤先生は、国立がんセンター研究所レジデントの後輩になります。

元々、日本がん予防研究会→日本がん予防学会、日本がん疫学研究会、日本がん分子疫学研究会→日本がん疫学・分子疫学研究会と小さな研究会が集まった学術集会です。日本がん疫学研究会は、富永祐民先生から始まり、渡辺昌先生、田島和雄先生、日本がん分子疫学研究会は、北川知行先生から始まり、今井浩三先生、樋野興夫先生な

ど、錚々たる先生が会長を務められています。がん疫学、予防に関して、第一線の先生がこの学術大会に集りました。

過去2年間、日本がん疫学・分子疫学研究会総会並びにがん予防学術大会はコロナ禍にてオンライン開催となりました。今回、ハイブリッド開催は費用がかさむことより、なんとか対面で開催したいと考えておりました。コロナ感染も再び増加傾向を示すという微妙な時期でしたが、コロナ対策を十分に示して、対面式の学会を開催しました。会期期間中は晴天で、非常に暑い京都の夏となりました。

今回のメインテーマは「強力な疫学のエビデンスを柱にがん予防のプライドをかけた挑戦」とし

ました。第一日目は、シンポジウム1「がん疫学研究における大規模研究リソース：使い方と課題」を日本疫学会と共催という形で開始されました。松田浩一先生（東京大学医科学研究所）が「バイオバンク・ジャパンの利活用促進に向けての取り組み」、川嶋実苗先生（国立研究開発法人科学技術振興機構）から「NBDC人データベースに登録されているがん関連データとその使い方」、松尾恵太郎先生（愛知県がんセンター）から「日本多施設共同コホート（J-MICC）研究」、澤田典絵先生（国立研究開発法人国立がん研究センター）から「多目的コホート研究データの利活用と課題」、藤下真奈美先生（国立研究開発法人国立がん研究センター）から「全国がん登録情報の利活用と今後の展望について」とわかりやすく講演をいただきました。第1、2日目、一般口演およびポスター展示が行われました。これらは、“若手のリクルート”ということで、応募演題より興味深い演題を口演として選考し、さらに、若手研究者優秀演題を選び、表彰いたしました。「都道府

県別にみるがん年齢調整死亡率の推移予測ツールの開発」（福井敬祐先生、広島大学大学院・先進理工系科学研究科）および、「癌細胞の肝内皮細胞への接着及び内皮細胞下浸潤におけるヒト胃癌細胞由来AMIGO2エクソソームの役割」（井筒瑠奈先生、鳥取大学・医・実験病理）が表彰されました。福井先生のアプローチは興味深く、早速、三重県医療保健部との会議データ作成に利用し、県レベルのがん対策の場で活用してみようと考えております。さらに“若手のリクルート”というより、癌研究者育成の種まきという意味で、中学生から大学生を対象としたポスター発表の機会を作り、発表者には奨励賞という形で表彰いたしました。ポスター会場では、多くの学生や研究者が熱心に討論している姿が見受けられ、将来が楽しみです。1日目の最後は、合同シンポジウム「集団と個、システムと分子のがん予防」が行われました。若手研究者主体の講演で、興味深い話が聞かれました。2日目の最後は、会長企画として、「がん予防京都円卓会議：提言に向けて」を行い



図. がん予防京都円卓会議

ました。中釜斉先生（国立研究開発法人国立がん研究センター・理事長）、垣添忠生先生（公益財団法人日本対がん協会・会長）、羽鳥裕先生（はとりクリニック・院長／前公益財団法人日本医師会・常任理事）、竹中洋先生（京都府立医科大学・学長）、酒井敏行先生（京都府立医科大学創薬センター・センター長）、田島和雄先生（美杉クリニック院長／元愛知県がんセンター研究所・所長）、梅澤明弘先生（国立研究開発法人国立成育医療センター研究所・所長）、小川朋子先生（三重大学乳腺センター・教授）、小林祖承先生（延暦寺一山・止観院住職）に登壇いただきました（図）。

各先生ご自身のがん予防の紹介を皮切りに、がん予防・医療の現状について、がん予防の今後について、語っていただきました。語れば優に1時間以上の先生方でしたが、多岐にわたるご意見をいただきましたが、最終的に「情報発信」という形で時間内にまとめることができました。

この原稿を書いている最中、コロナの第7波到来となりました。本当に晴れのつかの間に、本大会を開催できたことは誠に幸運でありました。次年度は、コロナ禍が終息し、安心していろいろな学術大会に参加できることを祈りつつ、これを持ちまして、私からの報告とさせていただきます。

『第288回 日本泌尿器科学会東海地方会』を主宰して

腎泌尿器外科 西 川 晃 平

2021年12月19日に第288回 日本泌尿器科学会東海地方会を開催いたしました。本学会は日本泌尿器科学会の地方会として、泌尿器科学の進歩、普及に寄与すると共に会員相互の親睦を計ることを目的に年3回開催をされています。また、若手の先生の発表経験の場としても貴重な機会となっています。今までは、会議場を使用しての対面形式での学会でありましたが、例にもれずコロナウイルスの全世界的流行の影響で2020年3月開催予定であった第283回は中止となり、その後の第284回からはWebでの開催となっておりました。第288回についても、その開催方法については議論がありましたが、最終的にはフルリモートで開催することとなりました。

学会では、一般演題23題に加え、優秀発表賞応募演題7題の発表があり、多くの議論が交わされました。加えて、特別企画「前立腺癌遺伝子検査の臨床現場の実情」というテーマで発表施設の前立腺癌遺伝子検査の現状と問題点についての議論

が交わされました。現在、泌尿器腫瘍学、特に前立腺癌の分野では、遺伝子検査を基にした治療薬剤選択の個別化が劇的な進化を遂げています。しかし、まだその実際の運用については各施設が試行錯誤をしているところであり、施設ごとの状況を共有し議論を交わせたことは非常に有意義でありました。また、サテライトセミナーとして、京都大学大学院医学系研究科 泌尿器科 教授 小林恭先生をお招きし「mCRPC個別化医療の5W2H」という演題で、ホルモン抵抗性前立腺癌の個別化治療の最前線についての講演をいただきました。

本会を通じて、変革が著しい前立腺癌薬物治療・遺伝子検査の知見を広げることができたのではないかと自負しております。

Web開催にもかかわらず、このような実りある学会を開催できたことは、関係者各位からいただいたご尽力の賜物と存じます。この場をお借りいたしまして、心より御礼申し上げます。

第36回日本整形外科学会基礎学術集会会長報告

整形外科学 須藤 啓 広

第36回日本整形外科学会基礎学術集会を2021年10月14日（木）・15日（金）の両日に三重県伊勢市の三重県営サンアリーナにおいて開催させていただきました。16年前に第20回本学術集会を内田淳正会長が主催して以来、2回目の開催ということになります。長い歴史と伝統のある本学術集会を主催させていただきましたことを大変光栄に存じますとともに、中島康晴理事長、学術集会運営委員会委員、協賛頂いた企業、学会事務局および日本整形外科学会会員の皆様に心より感謝申し上げます。

学会テーマを「みなあやし」と致しました。ご存じの方がおられるかもしれませんが、この言葉は本居宣長が残した言葉であります。本学会を開催する伊勢市の隣にある三重県松阪市で生まれた医師であり、国学者であった人物です。直訳は「すべて不思議」となりますが、世の中の様々な事象に対して先入観とか常識あるいはそれらしい理屈という色眼鏡で見るのではなく、驚く心となぜだろうという問いかけを常に持ちつつ考えるよう示唆した言葉になります。基礎研究に通ずるものがあると思い、テーマとさせていただきました。

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、日本整形外科学会との協議の結果、現地開催とWEB配信を併用する「ハイブリッド開催」とさせていただきました。基調講演、特別講演、招待講演、教育研修講演、共催セミナーは現地開催＋オンデマンド配信（11月1日から14日まで）とし、いずれも教育研修単位を取得可としました。また、第28回日整会研修指導者講習会、第59回日整会骨・軟部腫瘍特別研修会を併催致しました。一方、主題セッション、一般演題（口演）、優秀演題セッ

ション（口演・ポスター）は現地開催＋ライブ配信とし、シンポジウムはより多くの方に聴講していただきたいという思いから、現地開催＋ライブ配信に加えてオンデマンド配信も実施致しました。ポスター発表は配信サイトでのスライド閲覧によるデジタルポスターとして実施させていただきました。

7月から急激に感染が拡大した第5波にはヒヤヒヤさせられましたが、お陰様で9月下旬より新規感染者数が激減し、10月に入り三重県では一桁台となり、10月4日以降伊勢市では新規感染者0人という状況になりました。一般参加者の来場を制限するかどうかについての協議も重ねておりましたが、10月より全国的に緊急事態宣言ならびにまん延防止等重点措置が解除されることをうけ、全ての参加登録者が来場可能な状態で開催することができました。しかし、総参加者数は1,983名でそのうち現地参加者は約1/4にあたる506名でした。また、教育研修会単位申込数は2,846件で現地受講が344件、オンデマンド受講が2,502件でした。緊急事態宣言は解除されたものの、病院など所属施設の行動規範によって現地参加が叶わ



図1

なかったという意見やWEBの利点を活用して現地参加しなかったという意見などが聞かれました。ただ、各会場ではZoomを駆使したりリアルタイムでの発表・質疑応答が行われ（図1）、学術集会の大切な目的である討論はできていたものと思っています。討論を盛り上げていただいた座長の先生方、演者の先生方に改めまして心から感謝申し上げます。

開会式では中島理事長から暖かいお言葉を頂戴致しました（図2）。その後、会長自ら国歌独唱をさせていただき（図3）、会長講演では我が国における整形外科基礎研究の現状についてご報告するとともに三重大学における基礎研究についてご紹介させていただきました。

基調講演は東京大学名誉教授の中村耕三先生に「ロコモティブシンドロームの背景とその目指すもの」を、招待講演はEORS2021会長のGianluca Vadalà先生に「MSC based intervertebral disc regeneration : From bench to bed side」を、Rush Medical CollegeのHoward S An先生に「Intervertebral disc degeneration and discogenic low back pain : The mechanisms of pain and emerging therapies」を、Danube University KremsのStefan Nehrer先生に「Artificial intelligence (AI) in musculoskeletal radiology」を、京都工芸繊維大学のGiuseppe Pezzotti先生に「Silicon nitride smart chemistry

for joint arthroplasty」を、Luxembourg Institute of HealthのBernd Grimm先生に「Real life matters : Monitoring patient activities can transform clinical diagnostics, assessment and treatment」をご講演いただきました。特別講演では海外でご活躍されているUCSDのKoichi Masuda先生に「椎間板治療に対するトランスレーショナルリサーチ」を、IUPUIのHiroki Yokota先生に「Application of tumor-suppressive, bone- protective secretomes for treatment of bone diseases」を、Rush Medical CollegeのNozomu Inoue先生に「三次元画像解析による腰椎疾患の解明」をご講演いただきました。教育研修講演では、菅野伸彦先生に「ロボティクスとナビゲーション」を、原田直純先生に「次世代ナノ免疫療法による難治性軟部肉腫への挑戦」を、石井優先生に「最新イメージングテクノロジーで迫る、骨・免疫・がん研究の最前線」を、平田仁先生に「脳科学が解き明かす複合性局所疼痛症候群の実像」を、國府田正雄先生に「一気通貫研究の小経験：脊髄損傷に対する顆粒球コロニー刺激因子を用いた神経保護療法の基礎研究から治験まで」を、川尻真也先生に「リウマチ診療におけるICTとAIの活用：ニューノーマル時代の医療DX」を、妻木範行先生に「iPS細胞を用いた関節軟骨損傷の再生」を、木戸尚治先生に「人工知能を用いた画像診断の進歩」を、中村博亮先生に「骨



図 2



図 3

粗鬆症性椎体骨折の診断と治療最前線－現時点でわかっていることとわかっていないこと－」を、松峯昭彦先生に「骨・軟部腫瘍の病態・治療研究の最近のトピックス」を、柿木良介先生に「再生医学として捉えた人工神経作成へのアプローチ」を、関矢一郎先生に「半月板修復難治例に対する細胞治療」を、池川志郎先生に「骨関節疾患のゲノム解析:現状と展望」を、山下敏彦先生に「脊髄損傷に対する自己骨髄間葉系幹細胞治療－基礎から臨床まで－」を、中村雅也先生に「われわれが目指す脊髄再生医療とは」をご講演いただきました。いずれも最新の知見と将来への課題について言及され、常に臨床を見据えた研究を意識することの大切さと、基礎的手法を用いた臨床的研究の重要性も再認識できるお話をいただきました。

シンポジウムは17の関連学会との共催で行いました。日本人工関節学会からは「人工関節置換術の「みなあやし」－forgotten joint 達成への基礎研究－」、日本腰痛学会からは「腰痛のメカニズム」、日本脊椎脊髄病学会からは「椎間板再生は

今どこまで来たか」、日本骨折治療学会からは「偽関節、感染性偽関節の基礎研究と臨床応用」、日本手外科学会からは「上肢末梢神経障害研究の最前線」、日本肩関節学会からは「術後の腱板修復に影響を与える因子」、日本足の外科学会からは「解剖学的見地から科学する足部・足関節疾患のバイオメカニクス」、JOSKASからは「Biological joint reconstruction」、日本小児整形外科学会からは「小児整形外科領域の基礎研究－その進歩と未来への展望－」、日本肘関節学会からは「肘関節外科に役立つ解剖学 最新の知見」、日本リウマチ学会からは「関節リウマチの関節破壊メカニズムと治療アプローチ」、日本リハビリテーション医学会からは「最大の内分泌器官である筋の役割」、日本骨関節感染症学会からは「整形外科のSSI予防を再考する」、日本臨床バイオメカニクス学会からは「運動器バイオメカニクス研究の新手法」、日本骨代謝学会からは「骨・軟骨代謝基礎研究の最前線：これは知っておきたい」、日本義肢装具学会からは「義足適応のための切断術と断端管理：



図 4

基礎と臨床」、日本バイオマテリアル学会からは「組織修復のためのバイオリジカルスキャホルダー異分野研究に学ぶ」というテーマをいただき、各学会における最新の基礎研究成果について指定演者からご講演いただきました。一般演題には805題の応募をいただき、その中から査読委員の結果をもとに658題を採択致しました（採択率81.7%）。ご応募頂いた先生方に加え、査読して頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。

閉会式では第37回日本整形外科学会基礎学術集

会会長である宮崎大学の帖佐悦男教授へモニター越しに会長メダル引き継ぎをさせていただき、学術集会を無事終了致しました。教室・同門会一同全力で運営致しました（図4）が、何かと行き届きな点も多々あったかと存じます。何卒ご容赦のほど、お願い申し上げます。最後に本学術集会のさらなる繁栄と整形外科基礎研究の益々の発展を心から祈念し、第36回日本整形外科学会基礎学術集会のご報告とさせていただきます。

第159回日本循環器学会東海地方会

事務局 三重大学大学院医学系研究科 循環器・腎臓内科学 藤本直紀

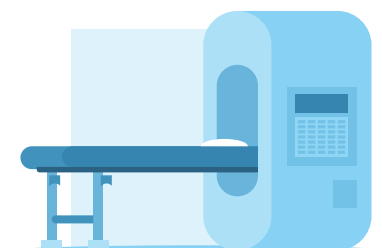
2022年6月4日、土肥薫会長のもとで第159日本循環器学会東海地方会が三重県医師会館で開催されました。コロナ禍の中、医局員一同で感染対策も行い大会の運営にあたりました。当日は快晴で絶好の地方会日和であり、130演題と通常の循環器学会東海地方会よりも多い演題応募があり、大勢の参加者にもご来場いただき、盛況に終えることができました。

本地方会は、循環器内科医が知っておくべき最近の話題を教育プログラムのテーマにしました。

教育講演では、佐久間肇先生（三重大学大学院放射線医学教室）から、「心臓病のCT・MR診断」のテーマで、各モダリティの強みや臨床データや臨床上の役割について、三谷義英先生（三重大学病院周産母子センター）から、「先天性心疾患

の成人への移医療支援」をテーマに先天性心疾患患者に対する医療行政上のサポートやその仕組みの変化について、ご講演いただきました。また、六鹿雅登先生（名古屋大学大学院病態外科学）からは、「最新の重症心不全治療」をテーマに、重症心不全における補助人工心臓・心臓移植治療について、を外科医の視点からご講演をいただきました。

開催日には幸い天候にも恵まれ、多くの方々のご指導・ご協力とご参加により、開会期間後も含め、大きなトラブルもなく終わることができました。ご指導・ご協力を頂いた学内の先生方、地方会関係各位に感謝申し上げます。また、事前準備や当日運営で多大なるご協力を頂いた秘書の皆さまに、心から感謝いたします。



第39回日本呼吸器外科学会学術集会 若手呼吸器外科医Case presentation award最優秀賞を受賞して

胸部心臓血管外科学 川 口 瑛 久

第39回日本呼吸器外科学会学術集会は2022年5月20日から21日に開催され、その中で40歳以下の若手呼吸器外科医の積極的な情報発信を目的とした、「若手呼吸器外科医Case presentation award」が開催されました。その中で最優秀賞を受賞したため、報告させていただきます。

2018年に発足した若手呼吸器外科医会(NEXT)が初めて開催したCase presentation awardでした。初期研修終了後から卒後15年目までの若手外科医が参加でき、50例以上の演題の中から抄録査読において高得点であった11演題が選ばれ、現地で発表することができました。採点基準は症例内容だけではなく、プレゼン内容、質疑応答、スライド、発表時間等を総合的に評価されました。今回私は「横隔膜縫縮術を施行し人工呼吸器離脱に成功した外傷性呼吸不全の一例」を発表しました。横隔膜挙上症は有症状時には手術適応がある疾患であり、昨今は胸腔鏡下で手術を行います。会場からの質疑も多く、全国の若手呼吸器外科医と



もに学びを深めることができました。また、どの演題も呼吸器外科医として経験すべき内容であり、これからの診療に活かせる知識となりました。

最後になりましたが日々ご指導頂いている高尾教授をはじめ、多くの面でご協力頂いております教室の先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。今後も研鑽を積んでいく所存ですので、引き続きのご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

第69回日本小児保健協会学術集会を主催して

小児科 平 山 雅 浩

令和4年6月24日(金)から26日(日)の3日に亘り、第69回日本小児保健協会学術集会(会頭:平山雅浩)を、三重県総合文化センターを現地会場にWEBでのLive配信を併用しハイブリッド開催いたしました。本学術集会は、小児保健に関連する多職種の会員が、子どもを取り巻く保健、医療、教育、福祉の向上に向け議論する学会

であり、三重県では初めての開催となります。大会テーマは「みんなが安心して安全な未来をめざしてーこどもの成育における医療・福祉・教育の協働ー」としました。主題プログラムとして、会頭講演、基調講演、3つの特別講演、6つの教育講演、12のシンポジウムを企画開催しました。会頭講演では「子どもたちが安心して安全な未来をめざ

して」と題し、私のこれまでの取組を踏まえ、医療はもとより、保健、福祉、教育、行政など、すべての分野の総力を集めることで、はじめて未来を担う子どもたちが安心して、安全に暮らすことができる社会実現への思いを発表させていただきました。基調講演は参議院議員の自見はなこ先生に「小児医療の未来～育成基本法の成立から『こども家庭庁』創設へ」と題して、ご講演いただきました。特別講演では東京大学教育学研究科の遠藤利彦先生に「アタッチメントの重要な役割を再確認する－乳児院調査の結果にも拠りながら－」、立命館大学の宮口幸治先生に「ケーキの切れない非行少年たちと頑張れない子どもたち」、及び緑園こどもクリニック山中龍宏先生に「事故による子どもの障害を予防する－変えられるものを見つけ、変えられるものを変える」と3つの講演を頂き、いずれも各分野での第一人者のご講演とあり、各会場大変盛況でありました。一般演題は170名（口演58演題、ポスター112演題）の演者の方に発表していただきました。その中から、特に優れた内容の発表をされた6名の方を、優

秀演題賞として表彰させていただきました。3日間で1,148名のご参加をいただき、新型コロナ感染症対策の中ではありましたが、現地会場には全国から約430名の方に足を運んでいただきました。2年余りのコロナ禍において、久しぶりの現地での学会参加となった方も多く、いつもとは違う雰囲気の中、対面ならではの大変活発な議論がなされる様子が各会場でみられました。

開催にあたり、2年余りの準備期間から会期中の運営に至るまで、三重大学医学部関係者の皆様をはじめ、行政、教育、医療、福祉、保健の各領域から様々なご協力を賜り、この様な大変有意義かつ盛大な会を開催できましたことに、心から感謝を申し上げます。



第62回日本先天異常学会学術集会 優秀演題賞を受賞して

統合薬理学 八十島 左 京

この度、2022年7月29日～7月31日に金沢市文化ホール（金沢市）にて開催されました第62回日本先天異常学会学術集会において優秀演題賞をいただきましたので、謹んでご報告を申し上げます。

演題名「放射線照射したゼブラフィッシュ仔魚の顎形成不全に対する葉酸の保護作用機構解析」

以下に研究内容について簡単にご紹介申し上げます。

ます。

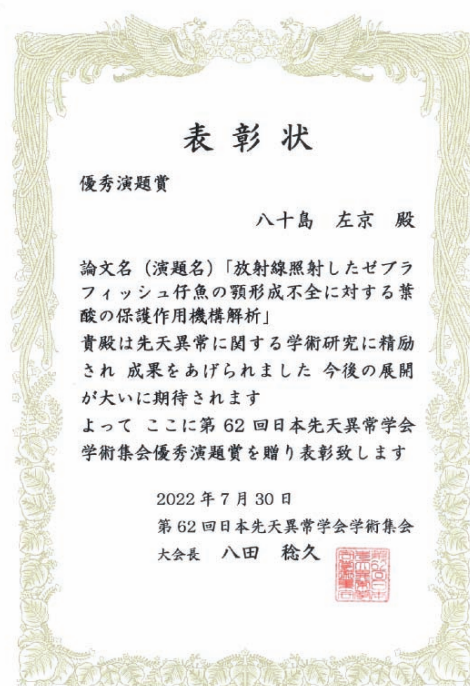
本研究では、発達期のゼブラフィッシュに対する放射線照射が顎形成に与える影響を検討し、それに対する葉酸の保護作用機構について解析しました。まず、受精36時間後にX線（8Gy）を照射することで著明に顎形成が障害されることを見出し、顎形成障害モデルゼブラフィッシュを作成

しました。また、照射の1時間前から葉酸（200 microM）を投与することにより、顎形成障害が有意に抑制されることを見出しました。さらに、放射線照射による顎形成障害のメカニズムと葉酸の保護作用機構の解明を目的としてトランスクリプトーム解析を実施しました。その結果、放射線照射によりp53に関連する様々なシグナル経路が異常となり、その一部の経路が葉酸投与により回復する可能性が示唆されました。今後の展望として、本研究で見出した遺伝子をノックアウトしたゼブラフィッシュを作製し、放射線照射による顎形成障害や葉酸投与による障害軽減への影響を解析することにより、放射線障害に対する葉酸の保護作用機構の一端解明につながりうると考えております。

私は本学医学部医学科2年生であり、2021年5月より西村有平教授が主宰される統合薬理学講座にて新医学専攻コースに在籍する学生として活動をさせていただいております。私にとって学会発表は今回が初めてのことで大変貴重な経験をさせていただいたと感じると共に、受賞を大変光栄に存じ、身が引き締まる思いです。本受賞を励みに日々の研究活動や勉学により一層精進して参ります。

す。

最後に、本受賞に際しご指導を賜りました西村有平教授、白水崇助教をはじめとする統合薬理学講座の方々、支えてくれた友人、先輩、後輩、家族にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



「日本医療薬学会2022年度JPHCS誌論文賞」を受賞して

附属病院薬剤部 岡 本 明 大



この度、「日本医療薬学会2022年度JPHCS誌論文賞」を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。この賞は日本医療薬学会の英文誌Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciencesに掲載された論文の中から選考され、2022年度は3名が受賞しております。以下に受賞論文の内容を紹介します。

オピオイド鎮痛薬に関連する最も一般的な有害

事象 (AE) は、オピオイド誘発性便秘 (OIC) です。ナルデメジン (NAL) は、OICの治療に広く使用されています。しかし、NALの最も一般的な治療関連AEとして下痢が報告されており、NAL投与中の下痢発症に関連する危険因子についてはほとんど知られておりません。本研究では、入院患者を対象とした後方視的観察研究により、NAL投与による下痢の危険因子を検討しました。

2017年6月から2018年12月の間に三重大学医学部附属病院でOICの治療のために初めてNALを投与された成人入院患者101例のデータを電子カルテから抽出しました。除外基準に該当する31名を除いた70例を本研究に登録しました。下痢発症群は、NAL投与後2週間以内のカルテ上に「下痢」の記載がある患者群と定義し、NAL投与患者における下痢発症の危険因子を特定するために、単変量解析および多変量解析を行いました。

登録された70例中22例 (31%) がNAL投与後2週間以内に下痢を発症し、下痢発症までのNAL投与期間の中央値は3 (1-12) 日でした。下痢発症群は、非発症群に比べ、NAL投与前のオピオイド治療期間が有意に長い結果となりました ($P=0.002$)。多変量解析により、NALによる下痢発症の独立した危険因子は、オピオイド開始後17日以降のNAL投与 (オッズ比 [OR] = 7.539, $P=0.016$) および膵臓癌 (OR = 6.217, $P=0.025$) であることが示唆されました。オピオイド開始後1日以内にNALを投与された患者の下痢発生率は、オピオイド開始後17日以上経過してからNALを投与された患者よりも有意に低い結果となりました (13% vs. 54%, $P=0.030$)。これらの結果から、NAL投与前のオピオイド治療期間が長いほど、下痢の発生率が高くなることが示唆されました。本研究結果はOIC治療におけるNAL使用に関して有益な情報になると考えております。

大学院で取り組んだ研究が、このような栄えある賞に選出され、とても光栄に思います。現在、



当院薬剤部では社会人博士課程に4名の薬剤師が在籍しており、業務を行いながら研究活動を行う若手薬剤師も増えてきました。今回の受賞が、後輩達にとって少しでも刺激になれば幸いです。今後も現在の状況に満足することなく、業務・研究・教育に邁進し、医療の発展に貢献していきたいと考えております。

最後になりましたが、本研究を実施するにあたり多大なるご指導ご鞭撻を賜りました三重大学医学部附属病院薬剤部 岩本卓也教授、大阪大学医学部附属病院薬剤部 奥田真弘教授、池村健治講師に深く御礼申し上げます。そして、薬剤部 水谷栄梨先生はじめ、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

〈受賞論文〉

Opioid therapy duration before naldemedine treatment is a significant independent risk of diarrhea: a retrospective cohort study. J Pharm Health Care Sci. 2021; 7 (1) : 3.

〈著 者〉

Akiharu Okamoto, Kenji Ikemura, Eri Mizutani, Takuya Iwamoto and Masahiro Okuda (JPHCS 2021 7 : 3)

日本病院薬剤師会 江口記念がん優秀活動賞を受賞して

薬剤部 赤 阪 未 来

この度は「がん患者の妊孕性温存療法に関して医療従事者に実施した啓発活動」について、日本病院薬剤師会 第10回江口記念がん優秀活動賞を受賞しました。この賞は、がん専門薬剤師部門の発展にご尽力いただいた故人（元日本病院薬剤師会理事）のご遺族からのご寄附をもとに、本会会員のがん領域における研究・教育の推進を支援することを目的として創設されたものです。このような名誉ある賞を頂戴することができ、とても光栄に感じているのと同時に、受賞の意味を理解し、今後もがん患者の妊孕性温存療法に関する啓発活動を多職種と実施し、医療の均てん化に努めたいと思っております。以下に、受賞に際し評価して頂いた、これまでの活動の概要を記載します。

2017年3月に三重大学医学部附属病院（以下、当院）が中心となり、三重県下のがん診療施設との連携を目的に、三重がん・生殖医療ネットワークが発足されました。発足後、三重県下のがん診療に携わる病院を中心にがん・生殖医療に関する講演会の開催を医師と企画し啓発活動を行ってきました。その際、三重県のがん診療連携拠点病院、がん診療連携準拠点病院、がん診療連携病院から講演会実施の了承が得られた15病院の医療従事者を対象に「若年がん患者に対する妊孕性温存に関する意識調査」を無記名で行いました。この結果をまとめ、日本病院薬剤師会雑誌へ投稿し採択されました¹⁾。

また、院内においては、医師、薬剤師、看護師、臨床心理士、チャイルドライフスペシャリスト、ソーシャルワーカー、胚培養士で構成されたがん・生殖医療カウンセリングチーム（以下、チーム）が発足されました。チーム発足の当初より、院内

の啓発活動に力を入れ、がん治療開始前に妊孕性温存療法に関する相談をしやすい環境作りを目指しました。チームでは、カンファレンスを月に1回行い、妊孕性温存療法を施行予定の患者や施行できなかった患者、施行後の患者の情報を共有し、多職種で認識を共有する場としています。チームの活動として、2017年から三重県下のがん医療に従事する職種を対象とした三重がん・生殖医療研究会を定期的に企画し、がん・生殖医療に関する情報発信や当院における多職種との連携を紹介し、がん・生殖医療分野に関心を持ってもらえるように取り組んできました。その取り組みの一環として行った、「三重県下の薬局薬剤師と当院に勤務する医師と薬剤師を対象とした女性がん患者への晩期合併症のフォローアップに関する意識調査」についても、日本病院薬剤師会雑誌に原著論文として採択されております²⁾。

この受賞を励みにして、令和4年度もがん・生殖医療に関する研究を継続し、がん・生殖医療分野の発展のために取り組んでいきます。がん分野以外における、性腺機能へ影響を及ぼす薬剤使用に関する研究に取り組み、エビデンス構築を目指していきます。

最後に、本報告書の作成にあたり、当院産科婦人科 池田智明教授、前沢忠志先生、吉田健太先生、西岡美喜子先生、二井理文先生、北野裕子先生、当院薬剤部 平井利典先生に感謝申し上げます。また、三重県下のアンケート調査にご協力いただいた方々をはじめ、がん・生殖医療カウンセリングチームに携わっていただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。そして、ご指導・ご鞭撻を頂きました当院薬剤部 岩本卓也教授に謝

意を表します。

1) 赤阪未来, 前沢忠志, 西岡美喜子, 北野裕子, 平井利典, 池田智明, 岩本卓也. 三重県下のがん診療病院における若年がん患者の妊孕性温存に関する医師, 薬剤師, 看護師を対象とした意識調査: 薬剤師の役割に関する考察, 日本病院

薬剤師会雑誌, 57(12)1379-1385 (2021)

2) 赤阪未来, 平井利典, 吉田健太, 二井理文, 池田智明, 岩本卓也. 医師, 薬剤師に対する女性がん患者への晩期合併症のフォローアップに関する実態調査, 日本病院薬剤師会雑誌58(7) 781-787 (2022)

第46回 日本リンパ学会総会 西賞 第29回 日本血管生物医学会学術集会 YIA優秀賞 を受賞して 新規リンパ管内皮細胞起源の同定

三重大学大学院医学系研究科修復再生病理学 丸山 和 晃

この度は、第46回日本リンパ学会総会 最高賞である西賞並びに、第29回日本血管生物医学会学術集会 YIA優秀賞を頂戴したため本会報に掲載させていただきます。恩師である栗原 裕基教授（東京大学）、富田 幸子教授（ヤマザキ学園）、今中 恭子教授（三重大学）にこの場を借りて感謝申し上げます。

〈自己紹介と研究の内容〉

私は長野県松本市出身で2011年に信州大学医学部を卒業し、その後2017年に東京大学で医学博士を取得、2021年より今中恭子教授の元で研究、教育、病理診断業務を行なわせていただいております。

誌面をお借りして、今回の研究に関してごく簡単に説明させていただきます。

心臓は人体で最もリンパ管密度の高い臓器の一つです。私はこれまで心臓リンパ管の新たな起源の同定（Maruyama et al., 2019）や心臓リンパ管発生を制御するシグナル（Maruyama et al., 2021）など心臓のリンパ管に関する研究を発表させていただきました。心臓とリンパ管には特別な関係があると漠然と予想していました。

一方、心臓発生学の進歩により、心臓は独自の進化を遂げたわけではなく顔面の筋肉と共通の起

源を持つという事がわかり知見が蓄積されつつありました。また医学部時代の講義で脈管形態形成異常が頭頸部に起こりやすいという話を漠然と思い出し、心臓と頭頸部のリンパ管に関係があるのではないかという発想に至り解析を開始しました。心臓と頭頸部の共通の起源（Cardiopharyngeal mesoderm: CPM）を標識する遺伝子改変マウスを使用し、細胞の系譜を追跡したところ頭頸部のリンパ管は体幹のリンパ管とは別の発生様式を経て形成される事を明らかにしました（Maruyama et al, 2022 in revision）。CPMは進化的に保存された中胚葉領域である事がわかっており、本研究はリンパ管の進化に関する点を解き明かした可能性があります。また、リンパ管奇形のおよそ80%が頭頸部に限局し、さらにその80%にPIK3CAの体細胞機能獲得型変異が存在する事が明らかとなっています。本研究はCPMに特定の遺伝子変異が蓄積し、リンパ管奇形（おそらく血管奇形も）が発症する可能性を示唆する研究でもあります。

現在、マウスで得られた知見をヒト胚組織標本を用いて研究中です（三重大学倫理審査番号H2021-228：代表、丸山 和晃）。その結果ヒト

では頭頸部領域の血管・リンパ管が4週程度で形成され始め、1-2週遅れて体幹のリンパ管網が形成されていくという事が分かり、マウスで得られた知見がヒトにも当てはまると考えています。

今後もさらに研究を進展させ、リンパ管の進化やリンパ管疾患の病態、治療薬開発などにつながる研究を進めていけたらと考えています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

第60回日本耳鼻科学会総会・学術講演会 若手奨励賞・会長賞を受賞して

三重大学大学院医学系研究科 耳鼻咽喉・頭頸部外科 森 下 裕 之



このたびは、2021年9月に滋賀で開催された第60回日本耳鼻科学会総会・学術講演会におきまして、若手奨励賞・会長賞を頂きましたことを報告いたします。

受賞した演題は「呼吸上皮腺腫様過誤腫（REAH）を合併した慢性副鼻腔炎手術例の長期予後の検討」という表題です。REAHは、1995年に初めて31例が報告され、新たに分類された鼻副鼻腔領域に発生する腫瘍様の病変であり、通常の慢性副鼻腔炎に認められる鼻ポリープと視診で鑑別することが困難な疾患です。私はこれまでの研究でREAHを合併する副鼻腔炎では鼻茸が多発して嗅覚が障害されやすく、短期の術後経過が不良であることを明らかにしています。しかし一方で、未だにREAHに関する研究は少なく、本疾患の長

期的予後、病因、治療法などの検討は未だ皆無に近いです。そこで本研究によってその長期的な予後を解明するために調査をしました。

結果としては、REAHを合併した慢性副鼻腔炎は術後も約半数の症例で長期的にポリープの再発を来し、嗅覚脱失も遷延するという不良な経過をたどり、REAH非合併例と比較してそのリスクが約6倍あるということを明らかにしました。それを発表しましたところ、本賞をいただくことができました。

私がこの研究を始めたのは、2014年であり、当院の耳鼻咽喉・頭頸部外科の後期研修医として1年目の時でした。そのときは耳鼻咽喉科医として右も左もわからない状態でしたが、当科の小林正佳先生よりこの研究を勧めていただいて、自分なりにひたむきに取り組んだことを覚えています。また、この疾患は病理学的診断が確立されていないために、病理診断医の存在が不可欠であり、当院の病理診断科である内田克典先生に協力をお願いしました。内田先生もこの研究に非常に熱心に取り組んでいただき、小林先生とともに、多数の手術患者の方のプレバラーテを何度も何度も見直しました。大変な作業ではありましたが、今となっては本当に良い経験であり、あの日々があったからこそ現在も両先生には本当に可愛がって指導いただいていることを実感しております。

今回はその長期予後の検討を行って新規性を含

む結果を出すことができ、それを発表して身に余る賞をいただけたことを本当に嬉しく思います。それはもちろん私の力だけでなく、耳鼻咽喉・頭頸部外科および病理診断科の先生方の指導があったいただけたものと思っています。しかしながら、REAHはまだそこまでしか明らかにならず、今後はその病態、治療法の解明が必須と考えています。そのためこの結果に満足せず、今後も研究を継続していく所存です。

最後に繰り返しになりますが、いつも最も親身になって手術や研究等を御指導頂き、今回も直接ご指導賜りました小林正佳准教授、病理学的診断について懇切丁寧に指導いただきました病理診断科の内田克典講師、ならびに、学会発表の機会を与えてくださり、熱心にご指導いただいています竹内万彦教授にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

学位記授与式

令和4年7月20日（水）三翠会館（多目的ホール）において学位記授与式が挙行され、伊藤学長より11名の方々に三重大学博士（医学）、の称号が授与されました。

令和4年9月21日（水）三翠会館（多目的ホール）において学位記授与式が挙行され、伊藤学長より1名の方々に三重大学修士（医学）、8名の方々に三重大学博士（医学）、2名の方々に三重大学修士（看護学）の称号が授与されました。



三重大学医学部の理念

Mission and Core Principles of Mie University Faculty of Medicine

確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな創造力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する。

Mie University, School of Medicine aims to raise medical personnel with a steadfast sense of mission and ethical view, and to cultivate in it students and faculties both rich creativity and research capacity.

The school will strive for development of human health and welfare and contribute to regional and international society.

— 編集発行 —

三重大学 医学部ニュース編集委員会

〒514-8507 津市江戸橋2-174

国立大学法人 三重大学医学・病院管理部

TEL. 059 (232)1111(代表) FAX. 059(232)7498

E-mail : s-hisyokoho@mo.medic.mie-u.ac.jp
